

表現なのかもしれません。墓地でもあつたこの場所をおとずれる人々の切なる願いは、愛する人の復活、再臨だったでしょう。シロスの浮彫は、そうした思にこたえるものでもあつたはずです。

ここシロスに、自国のロマネスクに誇りをもつフランス人さえらやむよくな、(歴史上でもふしきに孤立している)傑作がのこされたのはなぜでしょうか。思うに、理由のひとつは、修道院に西ゴートの宝物やイスラームの工芸品、ペアトウスをはじめとする写本その他、多様で質のたかい文物が収蔵されていたこと。どうせん作り手はそれらを参照したでしょう。もうひとつは、シロスの地理的条件です。キリスト教美術というものは典礼をおぎなう役割をも

つ、いわば「用の美」なのですが、ロマネスク美術は「試行錯誤の美」でもあります。つまり形式化された以前の美。もしもシロスが往来しやすい土地だったほかの地域の「試行錯誤」の影響をうけて、柱頭にキリスト伝をきざんだかもしません。しかしそうはならず、まるで古代ローマの浮彫のように大きな石板に描かれていることが、結果的に、斬新な印象をもたらしています。

信じなかつた弟子、気づかなかつた弟子。彼らをゆるすキリスト。たとえおろかでも、よわくとも、主はきっともどつてきてくださる——シロスの石が語るのは、そうした人々の願い、私たちの希望なのです。

修道院の入り口には、応対の心得があり、円熟して彷徨癖のない、賢明な老人を置く。(中略)何者が戸を叩き、あるいは貧しい人が声をかけたなら、「神に感謝」あるいは「祝福を」と応える。そして神に対する畏れに裏打ちされた柔軟さと溢れるような愛を持って、ただちにこれに応える)

この記述に従えば、わたしたちは修道院の門をたたくと、まず、門番たる老人に出会うことになる。その後、わたしたちは、修道院長ドミニゴと彼に従う修道士らに迎え入れられ、共に祈り、平和の接吻を交わす。その後、彼らは謙遜の意を示し、「頭を下げ、あるいは地に全身を伏して、同じく迎え奉るキリストを客の内に礼拝する」。

修道院とはいつたいどのような存在なのだろうか。スペイン北部の都市ブルゴスのそばにあるシロス。そこにたつサン・ドミニゴ・デ・シロス修道院は、フランスのル・トロネ修道院などとならび、陽光に柔らかく映える回廊で著名な建築である。わたしたちが目にすることの回廊は、一一世紀にかたちづくられたロマネスク様式の姿をなおとどめている。

修道院の創建は、八世紀にイベリア半島にイスラームが侵入する以前の西ゴート時代にまでさかのぼる。もともとサン・セバスティアンと呼ばれた修道

それは、自らの心身を神に捧げ、世俗世界から切り離された修道士が、祈り働くことにより、神のための生活を送る場所である。サン・ドミニゴ修道院も含め、今では使われなくなった修道院の多くは、観光客が自由に足を踏み入れ、あちこちを見て回ることができる観光資源となっている。しかし実際に修道士が生活している修道院では、壁を隔てて外の世界と中の世界とはまったく異なる意味をもつ。もし、わたしたちが、千年前のこの修道院に立ち寄るならば、どのような扱いを受けることになるだろうか。

それを知るために、この修道院も属しているベネディクト会系修道院の基本原則を記した、「ベネディクト戒律」を紐といてみるのがよい。戒律六六章にはこうある。

中世の修道院  
小澤実  
歴史家  
Minoru Ozawa

わしとして、すべての客をキリストとして迎え入れなければならないからである。その結果として、ドミンゴらは、わたしたち客人の中にキリストを見、そのキリストにふさわしい謙遜の意を示すのである。そして共に祈り、「親切の限りを尽くしてもてなす」。ドミンゴは客の手に水を注ぎ足も洗う。足を洗い終わつたら、「神よ、私たちはあなたの神殿で慈愛を注がれました」という聖句を唱える。

このような長々しい儀式をへてわたしたちはようやく修道院の内部に立ち入ることができる。その場合、わたしたちはキリストとして扱われているのであり、そうであつてみれば、門をくぐり修道院長らの挨拶を経たのちの訪問者は、修道士らから崇敬されるべき特別な存在となつてゐる。

しかし、これほどまでに建物の内外の区別を設ける修道院の内側とはどうなつてゐるのだろうか。やはり戒律六六を見てみよう。

（もし可能なら、修道院のうちにすべて必要なもの、たとえば水、粉挽き場、菜園があり、またもちろんの作業が修道院の内でできるよう、修道院は造られてはいけなければならない。こうして修道士が外を歩き回る必要がないようにする）

寝室や食堂に加えて、ここでは、修道院には、その内側でおおよそ生活ができるだけの設備がそなわつてゐることが望ましいとされている。

それはなぜか。「外出することは、修道士の靈魂のためにまったく益にならないから」と戒律には記されている。つまり、修道士の魂は、修道院の内部にいてこそ、修道士にふさわしい状態をたもつことにしている。

になる。靈的な意味で、修道院の外と内は全く別世界と認識されていたのである。

そうした修道院の内側のなかでももつとも神聖な場とされるのが回廊である。回廊とは、修道士たちが靈的修行を行う場であり、ラテン語でクラウストルム、英語でクロイスターと呼ばれる場である。そこは本来的に外部の者の立ち入りを拒む静謐な場である。修道士たちは、この場で祈りを捧げ、魂の修養を行う。サント・ドミニゴ修道院がほこる回廊部分に彫られた彫刻は、ただただ見せるためのものでもなければ単なる飾りでもない。声を出すことなく天主世界に心を預けようとする修道士たちが、対話の相手として向き合う対象でもある。

聖ドミニゴの時代からさほど隔たっていない一二世紀に、シトー会の聖ベルナールは、ある修道院長

にあてた弁明書簡のなかで次のような発言を残している。

（一言で言って、驚くほど多様な姿をしたさまざまなもの像が、数多くいたるところにあるために、修道士は書物よりも大理石を読み解こうとし、神の捷を默想するよりも、日がなこれら奇怪なものを一つ一つ愛でいたくなるだろう）

（などもシンプルを好むベルナールは、ひとびとの感情に訴えかけるロマネスク的な彫刻を批判しているわけだが、それは逆に言うと、これらの彫刻がいかに修道士たちの心を捉えていたのか、つまり対話する相手としていかに修道士の靈的鍛錬に役立つていたのかの証左でもある。

（ためにまったく益にならないから）と戒律には記されている。つまり、修道士の魂は、修道院の内部はしなくもベルナールが漏らしているように、修

道士の鍛錬は書物を読み解くことが肝要である。サント・ドミニゴ修道院はまた、周囲に名を轟かせるほどの図書館とその図書を書き写すための写字室をもつ、知のセントラルでもあった。現在ブリティッシュ・ライブラリーに収められている、リエバナのベルトウス『默示録註解』もまた、このサント・ドミニゴ修道院で生み出された。しかしこの写本も、テキストの内容ではなく、そのテキスト内容を視覚的にあらわした極彩色の挿絵こそが、読むものころにイメージを植え付けてゆくのである。

書物を読むことが修道士の日々の仕事でもあるといふ。しかし文字テキストだけではなく、彫刻にせよ写本挿絵にせよ、視覚に訴える要素もまた、修道士たちの靈的鍛錬に寄与していた。

美しき魂を涵養する場としてのサント・ドミニゴ修道院を見てきた。しかし、修道士の靈魂にとつての桃源郷たる修道院もまた、世間の喧騒と切り離されていたわけではない。

一二世紀初頭にラテン語で書かれた聖ドミニゴの伝記は、ドミニゴを「囚われ奴隸の解放者」と評している。ドミニゴがその修道院長時代、ムスリムに囚われていた一万四〇〇〇人ものキリスト教徒の奴隸を自由にした、という逸話に由来する。逸話の内容を具体的にいふと、彼は、修道院の資金を用いて、同胞であるキリスト教徒をムスリムから買い戻したということである。

サン・ドミニゴ修道院からさほど離れてはいなカステイリヤ・レオン王国の境界地帯では、あ

いかわらずキリスト教徒とイスラーム教徒との戦いが展開されていた。キリスト教側がイスラームから土地を奪い返そうとするレコンキスタとよばれる動きである。このようなムスリムとの戦いの中で、捕虜になるキリスト教徒も数多いた。中世の戦争の基本は、相手を殺害することではなく、捕まえることである。というのは、捕虜として捕まえておけば、敵方との交渉次第で身代金と交換できるからである。

買戻した人数が一万四〇〇〇というのは誇張であるにしても、それなりの数の捕虜となつたキリスト

ト教徒を解放したであろうことを思えば、本来、清貧を旨とする修道院に相当の資金があつたことが推測される。実のところ、ドミニゴの名前は、この時代の王家の人物や有力者（かのエル・シットも！）が土地の売買をしたことを記録する文書の署名欄でしばしば確認できる。署名欄というのは、本人もしくは代理人が、その取引が有効であることをその場で確認するためにサインをする箇所である。通常、そこには、同時代の王族、諸侯、司教、修道院長らが取り戻す事ができる。祈りの場であるサント・ドミニゴ修道院は、ここで現実世界と切り結ぶ事になる。

すでに見てきたように、修道院はそれ 자체で独立したひとつの社会であろうとし、さらに言えばその社会を運営する会社のごとき組織がかたちづくられていた。修道院長の差配ひとつで、この会社は、栄えもすれば傾きもある。捕虜の解放に奔走し奇跡を起こして聖人となるドミニゴは、修道者としてもひとびとの尊敬を集めていることだろう。なればこそ彼の聖人としての伝記が書かれたわけである。しかし戦争状態が続く現実の中世社会においても、同胞たるキリスト教徒を解放するために修道院の懷に手を突つ込み、兄弟たる修道士や修道院に付属する農民たちを食べさせるために確かな経営手腕を發揮した、有能なCEOでもあったことを思い起してもよいかも知れない。